

ゲキ×シネ 「髑髏城の七人～アオドクロ」

2008(平成20)年7月5日鑑賞<梅田ブルク7>

★★★★★



撮影監督＝大嶋博樹／著作＝松竹、ヴィレッチ／映像製作＝イーオシバイ／作＝中島かずき
／演出＝いのうえひでのり／出演＝市川染五郎／鈴木杏／池内博之／高田聖子／三宅弘城／
栗根まこと／川原和久／タイソン大屋／中野英樹／山中崇／安田栄徳／杉山圭一／高杉亘／
小村裕次郎／川原正嗣／前田悟／村木よし子／山本カナコ／柴田健児／小寺利光／島田裕樹
／小椋太郎／蝦名孝一／村木仁／逆木圭一郎／ラサール石井／佐藤アツヒロ（イーオシバイ
配給／2005年日本映画／200分）

……同じ登場人物、同じストーリーでも、役者が変われば大きくテイストが
変わるもの！ それが、『アカドクロ』と『アオドクロ』を見比べればよくわ
かる。『アオドクロ』の目玉は、歌舞伎界のプリンス市川染五郎の起用だが、
その滴り落ちる汗にビックリ！ どちらか1本でもいいが、2本を見比べべ
ばその価値が3倍にも4倍にもなること確実。しかして、『アカドクロ』と
『アオドクロ』どちらが好き……？ そんなことを考えているあなたは、既に
ゲキ×シネの虜に……？

テイストが変化した要因は……？

『アカドクロ』鑑賞の1週間後に『アオドクロ』を鑑賞。『アカドクロ』と『アオド
クロ』は、登場人物は同じ、そして基本的なストーリー展開も同じ。しかし、同じ登
場人物、同じストーリー展開でありながら、『アオドクロ』のテイストが『アカドク
ロ』と大きく変化したのは、出演者を総入れ替えしたため。つまり、役者が変われば
キャラは同一でもその表現の仕方が異なるため、演出のウエイトをどこに置くか、歌
をどの程度活用するかなどが変わり、そのテイストが大きく変わるわけだ。

また、シンプルだった『アカドクロ』に比べると、『アオドクロ』は多少登場人物
が増え、物語が膨らんでいるのが特徴。

テイストの変化 その1——捨之介は？ 天魔王は？

『アカドクロ』と『アオドクロ』のテイストの変化の第1は、『アオドクロ』では主役である玉ころがしの捨之介と天魔王に市川染五郎という華のある歌舞伎界のプリンスを起用したこと。それによって、天魔王としての顔をあまり見せなかった『アカドクロ』の古田新太に比べると、白を基調とした凛々しい姿の天魔王の顔が割と頻繁に登場することに。

染五郎の滴る汗に注目！

「ゲキ×シネ」をはじめて知ったのは、5月15日に観た『メタルマクベス』（07年）だが、そこではかぶりつきで観た松たか子の愛くるしい唇のアップに大感激。こんなワンショットは、いくら舞台のS席でも見れないし、持参のオペラグラスでもそこまでリアルに捉えるのはムリ。それを可能にするのが、ゲキ×シネ専用セットされた数台のカメラというわけだ。

パンフレットにある市川染五郎談によれば、「客席の上手、下手、正面はもちろん二階席、花道、舞台っ面にまでバズーカ砲みたいなカメラがあって、さらにそのカメラが無人数のに動くんですよ」とのことだから、演ずる方は大変だが、それで編集されたゲキ×シネを観る方は楽しいはず。そんな数台のカメラとアップ映像のおかげで実感したのは、当然のことながら大立ち回りを演じた後に市川染五郎がかいている汗の量。まさに、真夏の甲子園で高校球児たちが流す大量の汗と同じように、染五郎の顔から滴り落ちる汗に注目！

これぞゲキ×シネのリアルさと舞台の感動を示す1つのメルクマール。

テイストの変化 その2——蘭兵衛は？

『アカドクロ』と『アオドクロ』のテイストの変化その2は、蘭兵衛役が美人女優水野美紀から池内博之に変わったこと。これによって、とりわけ後半、蘭兵衛から森蘭丸に変身してからの雰囲気や衣装が全然違うものになるからその変化はすごい。

女性ファンはハンサムでクールな池内博之演ずる蘭兵衛と森蘭丸の2役も大歓迎だろうが、美人女優好きの私としては、どちらかという『アカドクロ』の水野美紀の方がお好み……？

テイストの変化 その3——極楽太夫は？

テイストの変化その3は極楽太夫。若松孝二監督の『実録・連合赤軍 あさま山荘への過程（みち）』（07年）では、過激派の女子学生遠山美枝子役を演じて「総括」されてしまった美人女優坂井真紀が、『アカドクロ』では極楽太夫を演じたが、これは美人を売りにしたもの……？

それに対して、『アオドクロ』で極楽太夫を演じた劇団☆新感線の高田聖子は、ポインさ（セクシーさ）の他歌のうまさ売り……？ それならボーカルをつけなければ……。そんな要請もあって（?）、『アオドクロ』では極楽太夫に扮した高田聖子の歌うシーンが多いのが特徴。もちろん、美人度においては『アオドクロ』の高田聖子より、『アカドクロ』の坂井真紀の方が数段上。しかし、歌唱力とポイン度そして大阪弁のレベルにおいては、明らかに高田聖子の方が上だから、その対比の妙を楽しみたい。

極楽太夫は罽毬城に乗りこむ七人衆の1人だが、彼女は雑賀衆の生き残り。そんな極楽太夫が、日露戦争における203高地攻略戦で日本軍が大苦戦した原因であるロシア軍が持っていた機関砲（銃）類似の武器を、蘭兵衛に内緒で隠し持っていたというからすばらしい。『アカドクロ』における雑賀衆のカッコいい衣装に比べると、『アオドクロ』での雑賀衆の服装は少し野暮ったい（?）が、極楽太夫が捨之介救出作戦において果たす役割は『アカドクロ』と全く同じ。そんな極楽太夫のテイストの変化を楽しみながら、『アオドクロ』を楽しみたい。

テイストの変化 その4——刀鍛冶が1人から2人に……

『アカドクロ』の評論で、私は「中島かずき作、いのうえひでのり演出の特徴は、奇想天外な発想と大がかりかつ緻密な構成の中、庶民の姿や庶民の視点が明確に描かれていること」と書いた。それはもちろん『アオドクロ』も同じだが、『アオドクロ』が『アカドクロ』と大きく異なるのは、『アカドクロ』で「ここで一句……」となかなかの才人ぶりを見せていた刀鍛冶の贗鉄斎（梶原善）が、『アオドクロ』では師匠の贗鉄斎（逆木圭一郎）と弟子のカンテツ（三宅弘城）の2人に分かれたためか、その才能が消えていること。

これは少し寂しいが、師匠亡き後、その志を継いだ弟子が、捨之介のために斬鑑剣

(ざんげつけん) と百人斬り用の刀をつくるという役割は同じだから、納得！

テイストの変化 その5——裏切り渡京は？

『アカドクロ』では河野まささが演じた裏切り三五が、『アオドクロ』では裏切り渡京と名前が変わり、これを栗根まことが演じている。ストーリー構成は『アカドクロ』も『アオドクロ』も同じだから、当然裏切りの回数や場面も同じだが、『アオドクロ』は裏切りの動機にソロバンを小道具として持ち出しているところが面白い。

さらに、ソロバンを弾きながら、計算ずくでどちらにつくかを決めるのは世渡りに必要不可欠な素質だが、『アオドクロ』の場合必ずしもそうではないところがミソ……？ また、計算のためのソロバンが、ラスト近くになると攻撃のための武器に変化するから、それにも注目！

これらのテイストの変化に注目しながら『アカドクロ』の特徴と『アオドクロ』の特徴を比べることができたのは、1週間の間に両者を観ることができたおかげ。甲乙つけがたいそれぞれのテイストをもった『アカドクロ』と『アオドクロ』を、できればあなたも続けて観ることをお勧めしたい。

テイストの変化がないのは？

これらのテイストの変化とは対照的に、『アカドクロ』と『アオドクロ』でテイストが全然変化していないキャラもある。その第1は、関八州荒武者隊のリーダーである橋本じゅんが演じた「抜かずの兵庫」と佐藤アツヒロが演じた「こぶしの忠馬」。つまり、名前と役者が変わっても、そのキャラとストーリーの中で果たすべき役割は不変かつ Forever！

また、ストーリー構成上のキーウーマンとなる沙霧役は、『アカドクロ』では佐藤仁美だったが、『アオドクロ』では鈴木杏。この2人も、美人度においてはやはり『花とアリス』(04年)以降女優としての進境著しい鈴木杏が上だが、テイストの変化はほとんどなし……。

「ゲキ×シネ ツアー2008」の成否は？

『アカドクロ』と『アオドクロ』は「ゲキ×シネ ツアー2008 in 梅田ブルク7」で観たもの。これは、当日料金2500円(リピーターは500円引きの2000円)で、『アカド

クロ』『アオドクロ』『SHIROH』『朧の森に棲む鬼』の4本を1週間ずつ上映する企画で、6月28日～7月25日まで実施されている。しかし、その反響、人気のほどは……？

私が観たのはいずれも土曜日だが、7～8割の入りだったからまずまず。しかし私としては、こんな貴重な企画は連日満席となり、大きい劇場に変更しなければならなくなるくらいの反響を呼びたいもの。だって、2500円（2000円）で、こんな面白いエンタテインメントを観ることができるのだから。そんな思いで私は、大阪日日新聞に連載している「弁護士坂和章平のLAW DE SHOW」の7月12日版に『「ツアー2008」で劇団☆新感線を！』というタイトルで『SHIROH』を紹介したが、「ツアー2008」の後半、『SHIROH』と『朧の森に棲む鬼』がどの程度観客を呼べるのか注目したい。



© 2005 松竹・ヴィレuzzi

2008(平成20)年7月12日記